



鎌倉見聞志

三編

卷三

13
2475
58



13
2475
58

謙念見習志は編指

余儀

一 并付成州安念と拷問の事
并 連判の事と捕らる事

一 由利中前和州筑長と欺事
并 親中祐友と討つて逐電の事

録念見多志はる浦十二

海成流安念と拷問の事

并一味の事ありと捕りし事

小島中流安念と歌むき連
判をとうむひを付し海に流れ
着付別ち庄君一語(品)付し吟
味せんと小島中流安念と



を引申 如く 女を 心より
まゝに 連まかり 弟付 秘り 拷
問せし 中 木の しく 逆言は
ゆき 中 中 中 中 中 中 中
し 連書 既 中 中 中 中
啼ふ 中 中 中 中 中 中 中
つめ 中 中 中 中 中 中 中
し 中 中 中 中 中 中 中

問 中 中 中 中 中 中 中
名 中 中 中 中 中 中 中
混 中 中 中 中 中 中 中
命 中 中 中 中 中 中 中
り 中 中 中 中 中 中 中
及 中 中 中 中 中 中 中
け 中 中 中 中 中 中 中
對 中 中 中 中 中 中 中

いふく 明白なる人 一國の長
いと 惟久き人 助け免れ 見え
罪せんと 名使の せしむる 白状
して 一人 命を 由らばし こと 悟ら
しく いらま 六 女を ありし 居せ
次 神切なり 仏門に 入る 悪魔
悪魔 悪魔 法の新り 人よ 首と せ
し ちみと 勤しむ せ け 交 運 辰と 津

して 天下の 愁と 除るん こと 全
誠なき 人と 除き 世界と ゆる
き なる 妙も 神と せしむ 入て こと
は けと 善なり 善く せし 忠義の
武と せしむ こと 誘ひ せしむ こと
の 流し せしむ こと 誘ひ せしむ こと
誘ひ せしむ こと 誘ひ せしむ こと
あり 誘ひ せしむ こと 誘ひ せしむ こと

此合の事やかしくも人面歎心の
國城の歌りけし人の舞の付りも
さうはありちるはしとて惟るも
このまき欲心は痛の侍の孫と
いと神一怒りと逃げ道と
そととものごとく争りゆり坂
いと花の時たると白はるかさいや
花の忠の常花とやまのつらとせ

あゝ種と講もあはてらん
らと恨あはれは令敷の限
あつらゝ天の四巻とゆんまのゆと
知れしよしかたむとあやのさ
あも人心中の思ひのらんと
あもよひふくま御もあはけり
連判枝の今も一時のさゆ
とあらし名捕り思いととらん

有人將軍をわんざとよまざるびりの伝
州の役人衆小波部親平浪平
しるより謀叛を起し山崎千景
女忠義と好むるあ中使の法
例と中捕も流罪も及びしよ
舟伴の法所弘明は前々妻
の白牧もあつてもいしよ一時的のや
つゝ是れなるも中々ははれぬとせむ

百捕へしとやられは將軍は
終るまゝのいせとの強弱のいさ
る程はおしよいしよと有り
は兼討畏り侍所は取り家臣はと
きりし由人とも振まひあひらち
るこそ向くは結城七前親光
安道九前長房の二京女も金全久保
長保射以親守有六前祐長同

ち流長が討つてとて
流も勇極とて宿り出る
のの故討つてまゝに
〜とて又思ふに
由利中八郎と同道
つゆりつとて
とあり〜
客と詰り

和国正古流長がとて
尉は親くけ向く
子建あまき生捕あつた
理もよき〜
〜の思ひ
〜の流長
〜の中
和国正

長が初子うづつてのまきつるりかり今いまの世よに
夫つともものままれれがが寛かん孝こう人のひとののままをを
得とりりはは任にん柄ぎょうのの中ちゆうににもも
ささもも身みののちちととももののちちににもも
のの陰いんににもも推お入いはは謀まう略りやくととののじじにに
惟ただ久く思おもひひをを入いれれととももののちちににもも
てて平ひらちちりりもも西せい新しんよよにに移うつりり秘ひにに對たい面めん
してしてややららるるのの目めのの計けいをを成なりすするる事こと

ちちとと見みるる一いつ帯たいののちちににもも出いすす
いいははららるるのの事ことをを入いれれととももののちちににもも
遠とほくくのの事ことをを入いれれととももののちちににもも
ままとともものの事ことをを入いれれととももののちちににもも
一いつ由ゆう果くわ何なにのの事ことをを入いれれととももののちちににもも
のの事ことをを入いれれととももののちちににもも
是こゝににもものの事ことをを入いれれととももののちちににもも
んんままとともものの事ことをを入いれれととももののちちににもも

ゆきしんまひしんまひしんまひとてりあふ
ましと好むせんがぬまありしこ
行阿しんまひしんまひとてりあふ
ちりぬまひしんまひとてりあふ
が積くがけしんまひしんまひとてりあふ
捕らぬしんまひしんまひとてりあふ
さるしんまひしんまひしんまひとてりあふ
まゆしんまひしんまひしんまひとてりあふ

途中よりて名捕しんまひとてりあふ
の恥辱しんまひしんまひとてりあふ
あふてのんまひしんまひしんまひとてりあふ
まゆしんまひしんまひしんまひとてりあふ
てあふしんまひしんまひしんまひとてりあふ
河死しんまひしんまひしんまひとてりあふ
半のあふしんまひしんまひしんまひとてりあふ
あふしんまひしんまひしんまひとてりあふ

室のうらやまの死にやまらば
親一人を流しにせしむるは
あはれも討死にせしむるは
らむと一息を絶し親を
誣のたまふそ有交ものありけ
討りて討死するは唯身の
於のんご世のほまは念
討死すとも世の
討死すとも世の

と居りて討死者
討り死すとも世の
愛とせしむる親を
うのお世にせしむる
るかまは一息を絶し
のい茶一息を絶し
を死するの討死すとも
今よとせしむる世の

よむ死して河のきりり入るま
よ使のもめめえかまかか
あひとてめく「利書」と解く
りりりゆめ流るの流長を
よあひとてめく「利書」と解く
をりて「利書」と一訓よるあ
かか「惟久」ゆび「信人」あつて
あけらるる「信」流る「敬」おさん

トカをきりりかまかか
馬子「おの」利書まか人と連を
唯即人用「信」よまかか

中利中「信」よまかか「流」まかか

「親」お「祐」友と「討」逐電の「事」

を「利」よ「和」田「よ」まかか「流」まかか
愛「心」まかか「事」まかか「回」まかか「事」まかか

者るのれら心とあり一回の害
と道と人なる人打連り高
とを敬を加へるまきりり天神
の衆より一りりり新よ人金
清もあけらるるもれまら
おつひ流長がまら馬を
あま切り放ちりりあま
るの腹を射ぬれば馬の
戻

風と倒れまら一りり大地
逆さぬも落るあまの
件のは兵あまらまら
て押へんしを流長部人を
んご二らる投のまら
大勢一なりきりせり
有まると云はりりりり
長母の勇さを流

乃如バハハ 氣を起るまき 獅なりて
種々流木の初はるぬが九斗
よりしも 獅なり 何れもとや 獅
も命ド 流長リ 引きさせんと
号の 強させんと ともらるま おち流木
ちじり 怒りまへら 号の 強の 精
ヲ 精もあふふ や 遊生か 中八心を
愛しと 神と 歌き ぬり せしや

合せてのも ちるの 入 某 一 あり
つらつら 入 ちいも ちら ば 後 せ ぬ と 以て
招くる 人 まいよ ぬり ともう して 吾 所よ
繩を 懸し ちあ ぬき しの 下 知る あり け
か の 目 なら 武 士 とも したら の 法 とも 知
も 定 ら ぬ ち 義 討 げ 下 知る あり ぬ
小 隙 の 舞 とも なる 舞 中 ち ら ぬ け
の 舞 者 怒り ぬ 絶 ち ぬ 神 とも け

浪子死をりるまのあまふせふせふ
浪教くは根こふとふらさん車
梅のしるまき眼いりし匂りかき
敷面の七華いころのまい逆さつら
み一浪親と床はまはあめ一思
ひ一浪国をいれむかみ一
引きゆへんがぬ流もみ向ひ根
思ころしむをを根をりまね

ら由ゆのくさかて流影るがよ
びとさるは海を浪をさる
り有が中へり由ゆの初子
あしるまはまの面月かや
りし由冷宮易持も根さるあ
新しふひしるま金一由ゆ
の由か糖と忍まのむらあ
都く由ゆの由持あま

白米のついでに子油と油を
とるにせしめし新なるものなりけり
く思ひのなるにやれ
流長が怒りと止りし報
しきもは新くと申りし
討ひの向くは新くと申りし
と生捕りしは新くと申りし
二月十日より別將軍の上り

海軍の船は商人の船あり討
ひの将人の由けしとて
あるかしの由半あり
浪平らむら白米小次郎
倉の中よりしもの
を新たりしもの
ぬらしおし
炭く由味

子方日計りて親よ建揚り
隠し居るのより波入り目も
捕へまゝ名をと命りぬ是は依
て是付討母ともささんともなす
帝祐友と大将とて二百人の
兵を加へ建揚り是向る親よ
日計の計を宣く一味のおま
懸くは捕へしるるよとて

今も身跡はしてはれぬ今
の種身も人ともぬもあはま
らふとあらぬせん業にらる
が味方の者もいぬは捕れ
種も人か命りてはらぬしあも
ひもよさぬの母をせんは
迎へる人んと一味のまも
ん取も取らぬは討討討

より得るはるに神いあ新
とま過再まな汁とらうら
と名付のさる付ら味は討死せん
とまん得ると格らあのみさうかあま
より知る親お建お格なり
一のさしと治せらるる討り
二月三日の女十部結女に余
人より一舟のの治別とさる

帝とあ内とて建格より
一わ波者せんかあのさし
そ親おが隠まじあありとらや
いあやとあつてあつてあつてあ
とよののあつてあつてあつてあ
所一のあつてあつてあつてあ
んとたぢらとあつてあつてあ
親おあつてあつてあつてあ

下宿へ参りて後にて家徒
の所へ招余人の名をいひし
も何れもむらも親おこし
甲冑と帯して馬に打乗り
と扱お居るなり初めの
しるりと指余人の所へ
引渡さん〜 刺さるる
浦子とせし信守〜 舟と
〜

忠として参りて〜 親
らん〜 河分ら〜 池
〜 初めの由く雷の
〜 切て入るゝあつと
〜 面々切ら〜 まら
〜 ぶ〜 乱〜 りら
〜 りらり招余人の所へ

矢張捨た力援ふぞおてを
ん切きりる程よを列す
るりる人よものみく誠
業も只る女の如くありて
右淫不致れ一毎ひ一節
まうゆ原之者十命祐友
みひ女怒りかゝる者も
欲ら小節ありと好と元
返らち

元身と下知らるる
の親もと同け切ら
平えり用心の法
て馬を花りて十命
祐友心ゆかりとち
二文合致しけり
致しめへまの親よ

討死うしならるら孫まごをし所ところとも申まを
大將たいしやうららかかれれるるははいいふふははいいふふははいいふふ
てて近ちかかかららかかりり親おやはは前まへははいいふふ
一いっ回かい討うちちてていいふふははいいふふ
去きららるるははいいふふははいいふふ
去きららるるははいいふふははいいふふ
加か勢せのの兵へいははいいふふははいいふふ
いいふふははいいふふははいいふふ

果はててははいいふふははいいふふ
り

漢かん人じんのの事ことをを論ろんずす

